



水源林の蘇生に尽力した男

多摩川源流の村

丹波山村

中川金治翁

文・針谷周作(『街の手帖』編集長)

VOL. 02



そもそも多摩川が玉川上水を通して飲料水として使われはじめたのは江戸時代のこと。幕府は安定水量を保つため、上流の森林地帯の一部で伐採を禁ずる保護政策を推進していたが、明治に入ると森林地帯の開墾が進み、材木需要の増大で乱伐が横行。荒廃が進んでいく。

激化する背景には、明治政府の新税制とともに国有林の誕生があった。それまで森林は村所有の財産であり、地域住民は生活資源として燃料や肥料となる薪や落ち葉などを採ることを許されていたが、伐木は盗伐とみなされ逮捕者が続出。それが人々の抵抗を増大させ、森林が皇室管理の御料林に編入されると盗伐行為はさらにエスカレートしていった。明治三十年初頭、源流域の森林は水源林としての機能をほぼ失い、中下流域で洪水や渇水が頻発していたそうだ。この水源林の復旧作業を任せられた人物こそ、中川金治その人だった。

お店がオープンし、他のスタッフに助けられながら早2か月。少々お腹の調子が思わしくなく（食欲の秋ならぬ、初夏か！）、季節はずれのカイロをお腹にあててお店に立っていた時のこと。ひとりのお客様が、五木の子守唄で有名な熊本県五木村の「くねぶ」という柑橘のゼリーをレジに。
「かわいいから、亡くなった女房にお供えしようと。
こういうの好きだから」
その言葉の裏に寂しさとやさしさが隠れていて、うるつとくる。
かわいい笑顔の描かれた、くねぶの黄色いゼリー。
「奥様、喜びますね。私も、祖母や母が好きだったものを
お供えします」「そうだよね……」
お互いほぐれた笑顔がこぼれる。
「カレー好きなんだ」と、ご自身にはジビエのカレーを。
お客様のお人柄が伝わってきて、いつのまにかお腹の不快感は消えていた。
日常に現れた天使……。
飛沫除けシートの向こうでも、ハートは伝わることを信じたい。



つれづれ 日記 VOL. 01

Granduo Kamata
グランデュオ
蒲田

文・天沼佐知恵



熊本県五木村のくねぶゼリー
小さな村g7ギフトショップ(グランデュオ蒲田西館1階)で販売中

太陽を浴びて育ったくねぶのゼリー